



価値観の相違を乗り越えるコミュニケーション努力の神経基盤

著者	鈴木 瑞恵
号	84
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	医博第3337号
URL	http://hdl.handle.net/10097/61275

氏名	すずき みづえ 鈴木 瑞恵
学位の種類	博士(医学)
学位授与年月日	平成27年3月25日
学位授与の条件	学位規則第4条第1項
研究科専攻	東北大学大学院医学系研究科(博士課程)医科学専攻
学位論文題目	価値観の相違を乗り越えるコミュニケーション努力の神経基盤
論文審査委員	主査 教授 荒井 啓行 教授 川島 隆太 教授 虫明 元 教授 瀧 靖之

論文内容要旨

他者と良好な関係を構築するためには、相互の共感に立脚した共感的コミュニケーションが重要である。しかし、私たちは日常のコミュニケーション場面において、容易には共感できない状況に直面することもある。例えば自己と他者の間に明らかな価値観の相違がある場合、共感しにくい状況が生じる。心理学の先行研究では、そのような状況下で役立つコミュニケーション方略として、批判的でない態度(Non-judgmental attitude)や柔軟な応答(flexible response)が示されてきた。共感しにくい状況下のコミュニケーションにおいてあくまで協調的な態度で応答しようとするならば、自他の価値観の相違を乗り越えて適切な返答をするためにコミュニケーション努力が必要となる。そのようなコミュニケーション努力の脳内表象は、未だ明らかではない。

したがって本研究では、functional magnetic resonance imaging(機能的核磁気共鳴画像法; fMRI)の手法を用いて、コミュニケーション努力の神経基盤を明らかにすることを目的とした。

fMRI実験のデザインは、共感しやすさ要因(共感しやすい/共感しにくい)と課題要因(コミュニケーション応答/情景描写)から成る2要因デザインを用いた。本実験には35人が参加し、課題はコミュニケーション応答課題(仮想の相手に対して返事をする)もしくは情景描写課題(仮想の状況について説明する)を行った。いずれの課題も自由発話による回答とした。また、事前アンケートで確認した各参加者の価値観を参考に仮想の相手と価値観の相違が生じる状況を作り、共感しやすさ要因を操作した。このような実験デザインによって、共感しにくい状況下でコミュニケーション課題を行う際に、目的のコミュニケーション努力を反映する特異的脳活動を抽出できると考えた。

実験の結果、コミュニケーション課題実施時に共通して反応する脳活動領域として、内側前頭前野、右側側頭極、両側角回、左側下前頭回、両側前部島皮質を認めた。また共感しにくい状況に共通して反応する脳活動領域として、内側前頭前野を認めた。そして、コミュニケーション努力を反映する脳活動領域として、右側下前頭回と内側前頭前野を認めた。

本研究は、コミュニケーション努力の神経基盤を初めて明らかにした研究である。先行研究から示唆されてきた右側下前頭回の機能(抑制性制御や反応切り替え)と内側前頭前野の機能(他者の心の状態についての推測、葛藤処理、予測)を踏まえて考えると、今回の結果は上述の批判的でない態度や柔軟な応答といったコミュニケーション方略が、共感しにくい状況で他者との価値観の相違を乗り越えるために適用されていることを脳科学的観点から示唆するものと思われる。

審 査 結 果 の 要 旨

博士論文題名..... 価値観の相違を乗り越えるコミュニケーション努力の神経基盤.....

所属専攻・分野名 医科学専攻・ 老年医学分野.....

氏名 鈴木瑞恵.....

医療現場において患者・家族および彼らを支える医療従事者との間に存在する多様な価値観の相違を乗り越えることは、社会の求める患者中心の医療の推進に重要である。そして、そのような自己・他者間の価値観の隔たりを乗り越えるためには、コミュニケーション努力が有用と思われる。

本研究は、価値観の相違があり共感しにくい他者とのコミュニケーションにおいて、その相違を乗り越え協調的応答を試みる際のコミュニケーション努力の神経基盤を検証し、特異的な脳活動を示す領域としての右下前頭回と内側前頭前野を初めて明らかにしたものである。コミュニケーション場面における共感の役割の重要性は先行研究において示されてきたが、コミュニケーションと共感の交互作用を検証した研究は過去にはなく本研究が初めてである。

また実験手法の観点では、実験刺激に対する共感しやすさを被験者各人の価値観に基づいて操作するという手法を用いたことにより、多様な価値観の相違を含む日常場面により近い実験パラダイムを構築することができた点も評価できる。さらに、慎重な予備実験を通じて実験刺激の選定および刺激割り付け手続きの妥当性を検証したことにより、本実験の行動データにおいて共感要因のコントラストが明瞭に得られたことも実験デザインの妥当性を裏付けるものと思われる。

また考察においては、コミュニケーション努力を構築する認知プロセスと従来有用とされてきたコミュニケーション方略との関係性や、共感ネットワークとの関わりに言及するのみならず、共感性の個人差や性差が与える影響や、本研究で選択した方法において想定された利点・欠点についてなど、本研究結果を解釈するにあたり考慮すべき要因について適切に議論されている点も評価に値する。

本研究からコミュニケーション努力に含まれる個別の認知プロセスについて新たな知見が得られたことにより、今後、個々人のニーズに応じて、より焦点化された効果的なコミュニケーショントレーニング開発につながることを期待される。

よって、本論文は博士（医学）の学位論文として合格と認める。